女子が男子の性欲処理をするホームルームがある学校の話

これは俺が都内のとある高校に通ってた時の話。
 この学校には独特の授業があった。それは毎週金曜6時間目にある「性欲発散ホームルーム」という時間。

思春期の男子生徒の健全な性的欲求処理と、男女の相互理解を促進する教育的一環でこの授業は行われていた。この時期の男子は性欲が強く、適度に発散させることが秩序をまとめるために必要との考えで、女子にとって

も男子の性欲を学べるという、Win-Winな試みだ。まあ、実際にやることは、ただ男子が女子の全裸を見てオナニーするというだけの時間だった。

毎週金曜日の6時間目。チャイムが鳴る少し前から、教室の空気は張りつめていく。
　男子たちは明らかにそわそわし始め、俺の隣の席の健太なんか、すでに股間を押さえながら小さく息を荒げ、時折小さく腰を浮かせて我慢している様子がはっきり分かった。後ろの席の一郎は机に突っ伏したまま足を小刻みに動かしていて、早くも興奮を抑えきれない様子だった。他の一部の男子も、すでにズボンの上から軽く股間を擦り始

め、期待で顔を紅潮させ、息を荒くしていた。

「はぁ…またこの時間か」
後ろの席から、クラスで一番スタイルの良い美咲が深いため息をついた。
彼女は長い黒髪と、おそらくDカップを超える豊満な胸が男子の間で圧倒的人気だった。
彼女は毎週この時間が近づくと憂鬱になり、吐き気すら覚えるほど強い嫌悪感を抱いているが、内申点への影響を考え、結局従うしかなかった。心の中では毎回「こんなの絶対おかしい」と叫んでいた。

隣の席のあかりが小さな声で美咲に話しかける。

「男子たち、目が完全にギンギンになってる…キモいよね。」

でも彼女たちも、この学校に3年間通う中で、このルールに慣れてしまっていた。「そういうもの」として受け入れ、抵抗せずに従う女子がほとんどだった。

一部の女子は最初こそ強く反対していたが、校則違反で停学の話が出たり、進路に影響すると言われたりして、結局諦めるしかなかった。

今では毎週金曜が来るたびに、ため息をつきながらも淡々と準備を始めるのが日常になっていた。あかりは特に恥ずかしがり屋で、毎回全裸になる直前まで手が小刻みに震え、顔を真っ赤にしながら「見ないで…見られたくない…」と心の中で何度も繰り返していた。

担任の先生が、いつもの穏やかな笑顔で教室に入ってきた。
「はい、みんな。今日も金曜日のホームルームの時間です。準備を始めましょう」

男子たちから一斉に歓声とどよめきが上がる。
「待ってましたー！」
「マジでこのために1週間我慢してた」
「今週は特に溜まってるんだよな…」
「美咲のおっぱい、今日も楽しみだわ…」
「遥の毛深いマン毛も見たい」
「なんかここ最近女子の身体が全体的に更にエロくなったよな」

先生が軽く手を叩いて進行する。
「では女の子たち、制服を脱いでください。」

女子たちは重い足取りで立ち上がった。
まずブレザーを脱ぎ、ワイシャツのボタンを一つずつ外していく。白いブラジャーが次々と露わになる。レースの縁が付いたもの、シンプルなスポーツブラ、色も白やピンク、黒と様々だ。男子たちの視線が一気に熱を帯び、教室の温度が上がった気がした。